

「奈何可」の訓について

倉 野 憲 司

万葉集卷二の挽歌に、「大津皇子薨之後、大来皇女、從ニ伊勢齊宮ニ上京之時、御作歌二首」と題して、次ぎの歌が載せられてゐる。

神風之 伊勢能國爾母 有益乎 奈何可來計武 君毛不有爾

(一六三)

欲見 吾為君毛 不有爾 奈何可來計武 馬疲爾 (一六四)

今この二首に共通する「奈何可」の訓について、聊か卑見を述べてみることにする。

さてこの「奈何可」の三字については、從來「ナニニカ」、「ナニシカ」、「イカニカ」の三通りの訓が行はれてゐる。このうち「ナニニカ」の訓をとるものは、寛永版・代匠記・土屋文明氏の総釈と私注くらゐであり、「イカニカ」の訓をとるものも、武田祐吉博士の新解と岩波文庫の新訓くらゐで、何れも比較的少数である。これに対して「ナニシカ」の訓をとるものは圧倒的に多く、考・古義・略解・檜燭手・攷証・美夫君志・沢瀉博士の新校・鴻巣氏の全釈・窪田氏の評釈・次田氏の新講・井上博士の新考・山田博士の講義等、殆どすべての註釈書がこの訓に従つてゐる。

ところでそれ／＼の訓の根拠はどうかといふに、山田博士を除けば、他は殆ど根拠らしい根拠を挙げてゐない。わづかに土屋氏

が総釈において、

「何しか」といふのが集中の用例に多いが、自分は「なににか」に従つて居る。或はもつとよい訓み方があるかも知れぬ。

といひ、美夫君志に「奈何可は旧訓にナニニカとあるはわろし」「奈何^{ナニシカ}ナニシは義訓也」といひ、窪田氏の評釈に、

奈何^{ナニシカ}しか来けむ。「奈何」は、旧訓「奈何」を「考」が改めたもので、用例の多いのに拠つてである。「し」は強め、「か」は疑。

といつてゐる程度で、他は黙して語らずといつたありさまである。然るに山田博士は、流石にしつかりした根拠を提示して、「ナニシカ」の訓に従つて居られる。即ち、

奈何可來計武 旧訓「ナニニカケム」とよみたるを考に「ナニシカケム」とよめり。「ナニニカ」といふ事不都合なりといふにあらねど、集中の仮名書その他にて必ずかくよむべしと主張するに足るべき例を見ず。而して一方に於いて卷七「一二五一」に「何師鴨川原乎思努比益河上」^{ナニシカモカハハラヲシヌヒイカハノガハ}卷十一「三五〇〇」に「何然公見不飽」^{ナニシカキミガミルニアカザラム}卷十五「三五八一」に「奈爾之可母奇里爾多都倍久奈氣伎之麻左牟」^{ナニシカモキリニダツベクナガキシマサム}卷十七「三九五七」に「奈爾之加母時之波安良牟乎」^{ナニシカモトキシハハラムヲ}卷十八「四一二五」に「奈爾之可母安吉爾之安良彌波許等騰比能等毛之伎古等」^{ナニシカモアキニシアラネバコトヒノトモシキコラ}又卷十二「二九八九」に「今更何牡鹿將念」^{イマサラナニシカオモヘム}などを見るときは「ナニシカ」とよむことの根拠あるをさとるべし。さて、その「シ」は強めの助詞なり。

とあるのがそれである。

然らばこの説は何等間然するところのないもので、「ナニシカ」の訓に定めてよいかといふに、必ずしもさうではない。もとより不都合な訓であるとは言へないけれども、私はむしろ「イカニカ」と訓む方がまさつてゐるやうに思ふのである。

今、集中における「奈何」の文字の訓を検べてみると、おほよそ「ナニ」「ナニカ」「イカニ」の三者を出でないやうである。

「ナニニ」と訓んだ例は無いやうであるから、「ナニニカ」の訓には従ひ難い。「ナニ」の例は、

恋ひ死なむそれも同じぞ奈何せむに人目他言こちたみ吾がせむ（卷四、七四八）

に見られ、「ナニカ」の例は、

思ひ絶えわびにしものをなか／＼に奈何苦しく相見始めけむ（卷四、七五〇）

ほとゝぎす思はずありき木の暗のかくなるまでに奈何来鳴かぬ（卷八、一四八七）——但し新訓には「ナドカ」とある。

に見られる。次ぎに「イカニ」の訓は、

梶領巾の懸けまく欲しき妹が名をこの勢の山に懸けば奈何あらむ（卷三、二八五）

相見ずは恋ひざらましを妹を見てもとなかくのみ恋ひば奈何せむ（卷四、五八六）

目には見て手には取らえぬ月の内の楓の如き妹を奈何せむ（同、六三二）

相見ずて日長くなりぬこの頃は奈何好去くやいぶかし吾妹（同、六四八）

思へども験もなしと知るものを奈何こゝだく吾が恋ひわたる（同、六五八）——但し新校万葉には「ナニカ」とある。

波高し奈何梶取り水鳥の浮き寝やすべきなほや漕ぐべき（卷七、一二三五）

（上略）見るごとに、まして思ほゆ、奈何にして、忘れむものぞ、恋とふものを（卷八、一六二九）

吾妹子が奈何とも吾を思はねば含める花の穂に咲きぬべし（卷十一、二七八三）

などに見られる。そこで問題の「奈何可」であるが、これを「ナニカ」と訓むと一句六言になるので、「イカニカ」と素直に訓んだらどうかということになる。さうして集中には「イカニカ」の仮名書きの用例が幾つか指摘出来るのである。

家に行きて伊可爾可吾がせむ枕づく嬌屋さぶしく思ほゆべしも（卷五、七九五）

うちなびく春の柳と吾が宿の梅の花とを伊可爾可分かむ（同、八二六）

常知らぬ道の長手をくれ／＼と伊可爾可行かむ糧米は無しに（卷五、八八八）

今のごと恋しく君が思はえ伊加爾加もせむ為る術の無さ（卷十七、三九二八）

なるほど山田博士が指摘されてゐる通り、「ナニシカ」の仮名書

きの用例も集中に散見して居り、またさう訓むべき訓字の用例も幾つかある。即ち山田博士の挙げられたものの外に、なほ、

(上略) 何然^{ナニシカ}も、わが王^{おほきみ}の、立たせば、玉藻のまころ、臥^ふせば、川藻の如く、靡^{なみ}かひし、宜しき君が、朝宮を、忘れ給ふや、夕宮を、背き給ふや(下略)——卷二、一九六

(上略) 何然^{ナニシカモ}、葦毛の馬の、嘶^いえ立ちつる——卷十三、三三

二七

などを挙げることができる。しかしこゝに注意すべきは、「ナニシカ」といふ語の「ナニ」を表はす訓字は、右の二例でも、山田博士の挙げられた三例でも、悉く「何」の一字を用ゐてゐて、「奈何」の二字を用ゐてゐない事である。従つて「奈何可」を「ナニシカ」と訓むことには躊躇せざるを得ない。そこで結論を申せば、

- ① 集中「奈何」を「イカニ」と訓むべき場合の多いこと。
- ② 「イカニカ」といふ語の仮名書きの例が散見してゐること。
- ③ 「ナニシカ」の「ナニ」を表はす訓字には「何」を用ゐて「奈何」を用ゐてゐないこと。

の三つを理由として、私は「奈何可」を「イカニカ」と訓むのが穩やかであらうと考へるのである。同じ卷二の同じ作者の歌、即ち「大津皇子、竊下^{ひそかにくだ}に伊勢神宮」上来時、大伯皇女御作歌二首」のうちの一首、

二人行^{ふたりにゆ}、去過難^{さへ}寸、秋山乎、如何君之、独越武(一〇六)の「如何」が「イカニカ」と訓まれてゐることも、この際参考となるであらう。

たゞこゝで断つて置きたいのは、

奈何鹿使ひの来つる君をこそかにもかくにも待ちがてにすれ(卷四、六二九)

海山も隔たらなくに奈何鴨^{めこと}目言^{めこと}をだにもこゝだ乏しき(同、六八九)

といふ二首の前者における「奈何鹿」、後者における「奈何鴨」の訓み方についてである。前者は一般に「ナニストカ」、後者は「ナニシカモ」と訓まれてゐるやうであるが、それは如何かと思はれる。前に指摘した「奈何」の二字の訓み方からすれば、前者を「イカニトカ」、後者を「イカニカモ」と訓む方が自然ではあるまいか。

問題の「奈何可」は、武田博士の新解と岩波文庫の新訓万葉集には、何の理由も挙げずに「イカニカ」と訓んであるが、私は以上の考証に基づいて、この「イカニカ」の訓が最も妥当と思ふのである。

——本学教授、文学博士——